二〇二一年一〇月一五日

秋郊の旅は入鹿の塚に果つ　雅流
風化せし平家の塚やちちろ鳴く　よし女
草虱払ひて入る句会場　よし子
人影のなきログハウス小鳥来る　宏虎
噴煙を眺めの風呂や秋高し　ともえ

二〇二一年一〇月一四日

ゴルフ打つ葛の奈落へ曲がりけり　あさこ
秋天下音いさぎよき馬の尿　きづな
秋寂ぶや寒山十得展を出て　よし子
秋時雨万象色を深めけり　宏虎
自転車も同舟島の秋遍路　ぽんこ
浮き沈むブイ眺めをる秋思かな　ひかり
虫の音が四方に輪唱ログハウス　菜々
秋航の水脈はヴァージンロードめく　よし女
草紅葉通ひなれたる五尺道　三刀
新米や列なすコイン精米所　うつぎ

二〇二一年一〇月一三日

平家塚佇みをれば秋の声　よし女
供養碑を鎮めの杜や秋しぐれ　よし子
割れ鏡つるべ落としの日を弾く　なつき
月天心いま消灯す塾の窓　きづな
城堀に矢折れ朽ち伏す枯れはちす　ともえ
巡航の船音高し秋入江　ぽんこ
秋天下像の竜馬に対しけり　うつぎ
窓越しがベストアングルあきざくら　治男
そぞろ寒宝物館床軋む　満天
牧の秋馬は尻尾を振るばかり　はく子
どの家も柿簾して同じ姓　菜々
黄金の風近江路は豊の秋　百合
一水の奏づ庭園薄紅葉　わかば
納めたる絵馬に誤字あり秋愁ふ　なつき

二〇二一年一〇月一二日

秋思憑く坑夫の像に佇ちてより　よし女
秋うらら外湯七つを巡る旅　こすもす
虫の闇次のバスまで半時間　うつぎ
秋晴れの沖に散らばる漁り舟　あさこ
潮騒と風吹き上げ来秋山路　なつき
キッチンは私のお城窓の月　菜々
寄居虫の引っ越し見て秋惜しむ　なつき
秋燕や郷関出でて半世紀　せいじ
日本海へと雪崩なす芒原　こすもす

二〇二一年一〇月一一日

秋晴れの嶺々に谺す沖汽笛　よし女
棚田道こすもす畑のそこここに　はく子
みやしろの磴が桟敷や村芝居　菜々
秋雲が子午線過ぎる吾もまた　よし子
節電の病院ロビーうそ寒し　うつぎ
回覧板だけの付き合ひうそ寒し　菜々
大文字目指し高きに登りけり　とも
奥院の急磴綴る彼岸花　わかば
みどりごの手を引くは兄園小春　せい
耳塚に悲しき謂はれ身にぞ入む　満天

二〇二一年一〇月一〇日

草の名を習ひつつ行く野路の秋　百合
城門をくぐれば馬上菊人形　せいじ
秋うらら老も上着を腰に巻き　かれん

二〇二一年一〇月九日

秋祭り人垣ばかり何も見えず　あさこ
スキップの出来る子出來ぬ子秋高し　有香
赤い羽根黄色き声が合唱す　宏虎
半纏を着て余念なき菊手入れ　せいじ
秋祭あこがれの子は山車屋根に　きづな
秋日落ついまはのきはの燃えにけり　百合
月の道先行く夫と歩の合はず　菜々
十三夜ベンチの影は彼彼女　ぽんこ

毎日句会みのる選・二〇二一年一〇月一七日